秋季大祭講話

世話人　島村廣義先生

今日は、立教の元一日を記念してつとめる大祭ですが、お互いに元一日をしっかり思案し、元一日に掛けられる親神様の思召を体して、それぞれがそれにお応えする道をしっかりつとめて通ることが何よりも大切です。

殊に、立教の元一日は、教祖五十年のおひながたの、先ず、初っ端の出来事ですが、教祖のおひながたは、ただ手本に終わらすのではなく、それを「通らんようなことではひながた要らん」と仰せられるように、私達が日々実践実行して通るべき手本ひながたで、また、勝手な解釈をして都合のいいように理解しないよう、しっかりと思案をしながら、それに応える道を通らなければなりません。

ところで、立教の元一日の思案もさることながら、大教会が来年つとようとする創立百十周年の記念祭も、それをつとめること自体、それぞれが一つの仕切をもって元一日を振り返り、思召される心をしっかりと心に治めると共に、それに添うお互いの毎日の通り方であるかどうかという反省とともに、新たな成人の道を決意して、心定めて通る活動こそが、記念祭をつとめる意義だと思います。

そう思うと、立教の元一日の思案も、また、教会が記念祭をつとめることの意義も一つになり、笠岡大教会としても、今日は、本当に大切な意義ある一日だと思います。

教会の元一日を遡りますと、どの教会も、ならん身上をおたすけ頂いた、ならん事情を治めて頂いたとか、親神様のおたすけを頂戴したことが始まりで、その元一日があります。

おたすけ頂くことは、親神様から見れば一つの「手引き」で、身上事情をたすけること　で、人間やこの世を創られた親神様の本来の思召をしっかり心に治めて、みんながそれに向かって助け合いながら仲良くつとめて欲しいと促される手引きです。

私は、身上や事情をおたすけ頂くことは小恩と申し、親神様の十全のお働きで守護され私達をお育てくださる御恩は、小恩に対する「大恩」であると申すことができると思います。

小恩で導かれる親神様のお心は、しっかりと大恩に報ずる道、親神様の望まれる陽気ぐらし世界実現目指して、みんなが助け合うて一手一つに突き進むこと(すなわち、私たちの信心の道ですが)、信仰を続けてもらうこと、また、教えを一人でも多くの人に説き広めることで、これがお道を信仰するお互いの心です。

教会名称は、そのために立ち働くところです。たすけられ、その御恩に報いようとする大勢の方々の真実誠の心定めを寄せて、ぢばに願い出て、ぢばと息一つ、末代の理としてお許し戴くのが教会で、親神様の思召実現に向かって、大恩の道を報ずる道、これを真剣に通るところが教会名称です。

このことをしっかりお互いに、記念祭をつとめ

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311

笠岡大教会
創立110周年

三年千日スローガン
諭達を実践し、をやの理を戴こう

本年の実践項目
つとめに専心
百万軒にをいがけ
全教会で陽気ぐらし講座開催

る活動の中に、あるいは、本日、立教の元一日、親神様の思召をしっかり思案して、心定めて通らなければなりません。これこそが、本日の立教の元一日の意義だと思います。

ところで、お道は三代の真柱様から四代にその理が継承され、昨年は『諭達第一号』に思召される真柱様のお心をよふぼく一人ひとりに徹底させるべく、一年間つとめ挙げられました。

それぞれの直属にあっては講習会を、広範地域にあっては「ようぼく躍進地方講習会」ということで、その徹底が図られました。

よふぼく一人ひとりに徹底が図られたということですが、現実の姿は、それぞれの教会から出された名簿は約七十九万に上りますが、その内「ようぼく躍進地方講習会」を受講された方は三十八万人、名簿の内の約四十八％でした。

この数を第七回の教勢調査と比べると、それぞれの所属する教会の月次祭に毎月参拝されるよふぼくの数と大体匹敵します。これが、今日のお道の現実の姿、現在の教勢の在り方・有り様です。

数の多少は別として、受講された方々は、親神様・教祖の思召を体して、それぞれが、真柱様の思召、よふぼくとしての私たちのつとめの目標をお示し頂きました。

その目標は世界だすけであり、陽気ぐらしに向かってしっかり邁進しようということで、そのためには、先ず、私たち自身が、大恩に報ずる道、すなわち、ひのきしんをもって世に働きかけていこうと申し合わせました。

笠岡大教会では、そのひのきしんの最も親神様・教祖にお喜び頂く道として「百万軒にをいがけ」を掲げて活動を進めてきました。

今年は、思召を体しての実動の年と位置づけて活動を続けてきましたが、神様の目から見れば、まだまだ、私たち教会長を始めよふぼくの実動については、大変お目だるいことだったのでしょう。その一つの姿として六月二十六日の事情 ―― 心ない青年によって、お祭りの真っ只中にかんろだいを引き倒されるという一つの大きな事情 ―― をお見せ頂きました。

親神様御自らのお姿の中にしるしを見せて私たちに急き込まれたことは何でしょうか。真柱様は、この節に際して、

かんろだいは、人間宿し込みの証拠として据えられるもので、ぢばの標識であり、私たちの信仰の芯であります。そのかんろだいに不祥事が起こったと、人間の手に掛かって倒されたということなのでありまして、これは、ぢばに対する私たちの信仰の姿勢を正すことが大切であると悟らせて頂いたのであります。

ぢばに対する姿勢ということは、親神様・教祖に対する信仰姿勢を問われているということなのであります。『おさしづ』に

皆、これ教えという理がある。教えに従うて通らんから綺麗な道がむさくろうしいなる。皆、行き難い道を尋ねて探すからどんならん。

というお言葉があります。

私たちは、教理については一応分かっていて、自分でこれでいいと思っていても、親神様のお目からご覧になればそうではない。綺麗な道をむさ苦しい通り方をしていることを、このお言葉はご指摘くだされているのではないかと思います。

知らず識らずの内に教えを通りやすいように解釈し、自分の都合のよいように悟ったりして、教えを自分に合わせようとしているようなことはないか。振り返ってよくよく反省しなければならないと思います。

このようにお言葉を下され、更に、七月の御本部の月次祭の祭文の中で、私たちはこのことに込められた親神様の激しく厳しいお急き込みを痛感し、お心に未だ遠い今までの歩みを深く反省してかんろだい一条の信仰に徹し、お急き込みくださるたすけ一条の上に一手一つにつとめ切る決意を固めさせて頂きました。

と、力強くご決意を述べられました。

真柱様から親神様に直接奏上された祭文で示されたこの一言こそ、教会名称の理を預かる教会長はもちろんのこと、よふぼく一人残らず、このお言葉こそが私たちの決意でなくてはならなかった

はずです。

しかし、今日、諭達を体して実動の年と申し合わせながら、その有り様をお互いに振り返ってみるに、教祖の御前で、はっきりと胸張って「私は一日勇んでたすけ一条につとめています」とお答えできる者は、この中に何人いるだろう。私をも含めてお互いの現実の姿を正視すれば、正視すればするほど真柱様のお言葉の重みをひしひしと感ぜずにはおれません。

今更申すまでもありませんが、「世界一れつをたすけるために天降った」と思召されるこのお言葉こそ、私たち道の者の根本目的です。そして、その目的達成のためにお教え頂いたのが、つとめとさづけと仰せになるたすけ一条の道です。

かぐらつとめを原点としたおつとめと、理をおゆるしを戴いて初めてお取り次ぎできる身上だすけのおさづけ、この無条件な実行こそが、この度の節にお応えする私たちの唯一の道であることを

真柱様から改めてお仕込み頂いたように思います。

たすけ一条の道として仰せられるつとめとさづけ、中でも、教祖の五十年のひながたに集約されるのはつとめの完成です。そして、現身を隠される事柄を通しておさづけの理を広く私たちにも下げられるようになりました。現身を隠された後、おさづけによって、お道は燎原に火を放つがごとくに伸び拡がりました。この事実は、何よりも、ご存命の理をもって働かれる教祖の御理の現われであり、ご存命の理の証しです。

つとめとさづけとお教え頂く二つのことは、正しく、私たちよふぼくとして通るべき最も大切な角目です。

おつとめは、この世を陽気ぐらしの世に立て替えるために教祖が直々に教えられたものです。おつとめの第一義は、かんろだいを芯としてつとめられるかぐらつとめのことですが、その御理を戴いて私たちの教会においてもそれぞれおつとめをつとめます。

人間創造の理をたすけの上に見せてやりたいと仰せられたのがおつとめです。朝夕のおつとめ、また、教会に詣られたときのおつとめ、あるいは、おたすけの上から、身上や事情のお願い、あるいは、いろんな不思議な御守護を頂いてその喜びから嬉しい気持ちから心の底から御礼申し上げる御礼のおつとめなど、もちろん、かぐらつとめの理を戴いてつとめる大祭・月次祭のおつとめは言うに及びませんが、おつとめによって、しっかり我が心のほこりを払い、教祖からお教え頂く澄み切った心に近づかせ、親神様の思召に溶け込むことが一番大切です。

心のほこりを払ってしっかりとをやの御心に溶け込むことが陽気ぐらしをするためには欠くことのできない条件です。

あしきをはらうてたすけたまへ
てんりわうのみこと

と二十一遍唱えてお手を振りますが、自分の胸を上から下へと払う動作がおつとめの始まりに必ずあります。自分の心のほこりを払うこと、心のほこりを払うてしっかり澄み切った心になる、親神様の御心に溶け込むことは、思い出したようにするのではなく、毎日毎日のことです。

心のほこりを払うことが陽気ぐらしの出発点になります。悪しきもの全ての原因は心のほこりにあるので、ほこりをしっかり払うことが大切です。

世の中のいろんなもめ事、病気や災難も心のほこりが原因です。悪しき事柄の元を自らがしっかりと絶つことが大切です。

しかし、こういう都合の悪いことは、得てして、他人の責任に転嫁してみたり、あるいは、いろんな祟りとか憑き物とか、あるいは、偶然にそうなったとか、運が悪いと諦めてみたりするのが人の常ですが、そういうことでは何の解決にもならない、何の御守護の道にも繋がらないので、事情や災難から逃れるためには、しっかりと心のほこりを払うこと、このことを教えられています。

「神がほうき」と仰っていますが、親神様の教えを基として、自らがしっかり心のほこりを掃除するとともに、世界の人々にも心のほこりを掃除して頂くように私たちはおつとめで祈念し、その理を伝えます。

おつとめによって、病もたすけて頂き、また、いつ降り掛かってくるか分からない災難をも逃れるだけではなく、天の与えをたっぷりと頂戴できます。百十五才定命、病まず死なず弱らない素晴らしい珍しい御守護を頂戴できるおつとめです。

更に、たすけ一条の道として、おさづけということ、おさづけの理についてですが。教祖二十五年先の定命をお縮めになって御身をお隠しになり、ご存命の理をもって働かれるようになってより、広く私たちにさづけの理を渡されるようになりました。

御身を隠される以前からも、おさづけの理はお渡しになっておられますが、広く私たちに渡されるようになった、一般に下げられるようになったのは、ご存命の理をもって働かれるようになってからです。

「今からたすけするのやで」、「これからだんくに理が渡そう」と仰っておさづけの理を私たちに広く下げられるようになりました。

おさづけは、身上たすけに下されているものですが、病気を治すだけのものではありません。おさづけを取り次ぐことによって、身上を通して頂戴した親神様のお手引きの意味をしっかりと思案して、それぞれに心遣い・通り方を振り返ってもらい、思召に近づくように手引きをする手掛かりにすることが大切です。

おさづけを取り次ぐ者も、また、我が事と受け止めて真剣に真心を込めておさづけを取り次ぐところに、自らも成人し、おたすけ頂く道ができてきます。

「話一条はたすけの台」と仰せになります。信念をもって親神様の教えを取り次がなければなりません。教えの理を聞き分けて、これまでの心の遣い方・通り方を改めるならば、必ず運命も転換され、大難は小難に、小難は無難にお連れ通り頂けます。

心さい月日しんぢつうけとれば
どんなたすけもみなうけやうで　八号45

と仰っています。

つとめとさづけが、私たちよふぼくのたすけ一条の御用の最も大事な大切な角目です。

よふぼくとしての元一日を振り返りますと、何が何でもたすけて頂いた御恩に応える、報いる道としてつとめとさづけと仰っるご恩報じの道に行き着きます。

それぞれの立場立場でしっかりと実践実行する心を定めて、つとめ励まなければならないと思います。

論達の思召を実践実行する、元一日に立ち返りおたすけ頂いた御恩に報いる、その実行こそ、私たちお互いの大切なつとめであることは、よく承知しているところですが、なかなか実行できません。実行に移せないのが常ですが、そのままではいつまで経っても何もできてきません。

前へ進むためには、常にお互いの元一日をしっかり振り返って、元一日に立ち返って思案することが基本です。そして、自分のいんねんを自覚するとともに、元一日、思召される親心にしっかり応える道を我が心にもう一度喚び起こすことが大切なことだと思います。

『おふでさき』にも

いまゝでにないたすけをばするからハ
もとをしらさん事にをいてわ　九号29

と仰せになっています。本元を教えてたすけることをしっかりお互いに思案しなければなりません。自分のたすけて頂いた元一日から、親神様の思召される元一日――今、よふぼくに一番求められていることは、このことだと思います。

記念祭をつとめることも、また、それぞれ教会においてつとめる大祭・月次祭の元一日を思案することも、みな、ご恩報じの道の根本、それぞれ

のお互いのいんねんの自覚から事が始まります。

しっかりと自分を見据えて、そして、自分の今日ある姿をしっかり反省しながら、思召し頂く道、また、初代が歩まれた道、歴代先輩が歩んでくれた道と比べて、今日の自分がどうあるのかということ、そして、その反省の上に立ってしっかり先行きを心定めて通らなければと思います。

その真実のまだまだ足りなさを、六月二十六日の節によってをやの御自らのお姿の中に示して急き込まれる親心を、お互いよふぼくとして厳しく受け止めてそれにお応えする道をしっかり歩ませて頂きたい。

それには、大教会の百十周年への活動、またそれをもって具体的にそれぞれにお定めて頂いている心定めを、先ずは自分の足許から実践実行して親心にお応えすることだと思います。

掲げたスローガンが、ただの申し合わせ・お題目におわることなく、名実ともにお互いにしっかり通って、をやのお入り込みを頂き、喜んで頂けるような姿をご覧頂いて記念祭をつとめることを意義付けたいと思いますし、また、お互いの成人の糧にしたいと思います。

今の時旬、諭達に示される事柄をお互いの立場で、それから目を逸らすのではなく、我が事としてそれを受け止めて、足許から実践実行に移して親心にお応え頂きたい、また、応えるように通ることを、お互いにお誓いをし、申し合わせをして、今日のお話を終わりたいと思います。

（以上要約。文責：編集部）

女子青年大会を終えて

「女子青年大会をさせて頂きたい」という声があがってから二年経ち、先日十一月三日に盛大につとめさせて頂くことができました。

開催までにもいろんな行事が続き、なかなか女子青年大会だけに集中することが出来ず、委員自体パニックになることもありましたが支部長様をはじめ婦人会の方々、諸先生方のお力添えにより総勢四百六十五名（うち女子青年百六十六名）の参加者の御守護を頂きました。有難うございました。

準備段階では何度も何度も委員が集まり、女子青年大会の内容をどういうものにするか、婦人会本部から先生にお越し頂き記念講演をして頂くか…等変更も度々あり悩むこともありましたが、その時に支部長様の思いを聞かせて頂きどれだけ私達女子青年に心をかけて下さっているか改めて深く感じさせて頂きました。

婦人会の方のお陰によりおつとめの手も揃い、委員もそれぞれ係を決め係ごとに婦人会の奥様方に御相談し動かせて頂きました。模擬店も全てお任せで「おんぶにだっこ」状態で本当に有難く思わせて頂いています。

委員は当日の動きの把握と午後からのアトラクションの練習で集まったりもしましたが全員揃っての練習が一度も出来ず、不安がたくさんある中で当日を迎えました。

しかしお天気も前日までの雨とは変わって晴天の御守護の中、おつとめ・記念撮影・式典とうつり、そのあとには各ブロックから代表で計四人の会員さんによる感話。同じ年代の方の思い・考え方を知る事ができ大変貴重な時間だったと思います。そして午後からの模擬店・アトラクション。模擬店も女子青年の声を全て取り入れて下さったものばかりでおいしく頂きました。アトラクションでは青年会の方に御協力頂いてオ

ープニングのダンスから盛り上がり、委員によるマジックショー・ロシアンルーレット・大抽選会と皆さんと一緒に楽しいひとときを過ごしました。

この大会を進める中で委員も一手一つにまとまったような気がします。

久々に女子青年大会を開催させて頂き大教会に若い声が響き、大教会長様、支部長様にお喜び頂けたこと、またこの時旬に委員としてお使い頂けたこと心より嬉しく思わせて頂いています。

またお忙しい中御参加下さった皆様方に、この場をお借りしてお礼申し上げます。

本当に有難うございました。

「陽気ぐらし講座」実施報告

川島郷分教会長　香取雅人

昨年の暮れは、やれミレニアムだ、Ｙ２Ｋだと世の中が騒ぎ立て、いやはやどうなるものかと、かたずを飲んで見守っておりました。

しかし、時計の針が十二時を回っても水道は使えるし電気も止まらず、「大山鳴動してねずみ一匹」とはこのことかと、拍子抜けして些かがっかりしている自分に気付き、大いに恥じたものです。

親神様のお働きは言うまでもなく、大勢の人々の真実があり何事もなく済ませて頂いたのに、誠に勿体無いことでありました。

さて、年が明けて二〇〇〇年になった途端、今度は「今世紀最後」を冠したイベントの花盛りとなりました。今世紀最後を加えればどんなものでも有り難味が感じられるので不思議なものです。この調子では、来年は絶対に「二十一世紀初めての」が、巷に溢れるはずです。ということは、飾り言葉を多用するものほど（？）で見なければならないのだと思います。したがって「今世紀最後の陽気ぐらし講座：こんな良いこともあった。こんな思わぬ出来事が……」と書こうと思いましたが、止めました。

陽気ぐらし講座には、親の声を素直に受け、それを苦労しながら実行したものにのみ与えて頂ける喜びがあります。

ましてや、大教会創立百十周年記念祭に向けて、親からの追い風を頂いている大きな旬ですのでその喜びも一入です。

私どもの教会で開催させて頂いた陽気ぐらし講座には、平日ではありましたが三十名ほどの方が参加され、熱心に講演を聞いて下さいました。そして、その半分を占める未信者の方々からも早期の次回開催を望む熱烈なリクエストを頂きました。

来年は、早いうちに開催させて頂き、三年千日、仕上げの年の大きなうねりに乗せて頂きたいものだと念願致しております。

Leader's Mini-Essay

心の通ひ路

「おさづけって、すごい!!。」

亀田山分教会　安達幸子

アフリカのルワンダの原野を、救援物資を積んで走っている時の事、周りは危険極まりない原野、いつ、猛獣が出るか、ゲリラに襲われるとかという緊迫した状態の時、一人の男の子が「お腹が痛い。」と苦しみ出し、余りの事に生きた心地もなく、「親神様、教祖、一体どんなお考えで、こんなむごい事をなさるんですか。」と怒ったり恨んだり。それでも、「南無天理王命」と唱え、おさづけを取りつぎました。恐怖の時が、どれだけ経ったでしょうか、苦しんでいた子供が、突然ケロッとして「治った。」と叫びました。一同抱き合って嬉し泣き、喜びました。

おさづけの尊さを目のあたりにした感動は、子供達の心を大きくゆさぶり、「おさづけって、すごい。」の声。あの切羽詰った時、一人の子供の腹痛を通してお見せ下さった深いお心に子供の心が、どんなに素晴らしい成長を遂げたか。息づまるシーンをお与え下さった深いお心、おさづけの効能を心に強く焼きつけられた出来事でした。

（村上忠雄先生のお話）

私は、五年前、左腕骨折入院中、毎日おさづけを頂き、おさづけの効能を目のあたりに見せて頂くという感激に、布教の家へ入らせて頂きました。

「神様が私を神戸へ呼んで下さっている。絶対行かせて頂こう。きっとおたすけを待ちわびている人がいる。一人でも多くの人に、おさづけを取りつぎたい一念で入寮。」

神戸では、早速、右半身不随、十三年間寝た切りの奥様にお会いでき、一年間、おさづけに通わせて頂き、二百回目の夜、「足が動いた。」という電話を頂き、急ぎ駆けつけました。医者が「死ぬまで動かないという右足が五十cm持ち上がり、右手の動くのを見た時、夢を見ている様、涙が溢れ、体が震えるという、今まで味わった事のない感激に、三人の寮生は、抱き合って、嬉し泣きしました。

入信の動機となった姉の不治の病も、おさづけにより、十数年輸血なしで通っています。私が布教の家にいた一年間、おさづけなしで過し、一年ぶりのおさづけを頂き、元気になりました。腰の痛みはありますが、今は輸血なしで過させて頂き、感無量です。この尊いおさづけで、にをいがけに励みたい思いです。

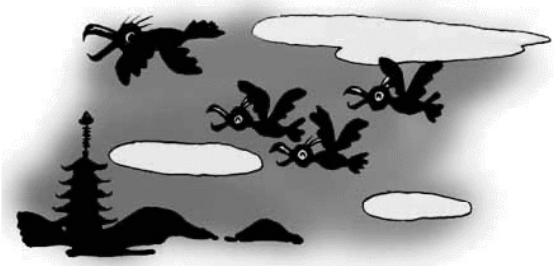
無

上小畠分教会長　田　中　一　矩

初夏のある夜、地元の友人の死を知らされた。親しい仲間と共に通夜に参列したが、家族の方に掛ける言葉は無かった。四十九才という若さである。幸にもお子達は社会人である。告別式はことの外暑い日であった。読経の中思い出がうかんでは消え、何時しか目頭が熱くなってきた。仲間達もハンカチで押さえていた。ただひたすら冥福を祈りつつ、見送らせて頂いた。

私が、教会を任せられて数年の内に、父前会長を始め、役員、布教所長、用木がたて続けに出直された。〝なぜ〟〝どうして〟〝そんなに早く〟古い着物を脱ぎ、新しい着物に着がえるようなもの、という出直しの教えを、説きもしたし知っていても。心を尽くし、真実を尽くしたつもりだが、人生五十年　といわれた年令に　いつしか私もなった。み教えをより深く求めて行かねばならない。この頃、出直しについての〝なぜ〟〝どうして〟という疑問が、少しずつではあるが理解できるようになった。何事につけても、親神様のご支配、教祖の子供可愛い一条の親心と。本席様が「なあ、源次郎さん、人間は四十日の患いというて、出直しの前には四十日ほど寝てな、しんどい思いをして、この世一代の埃を払い落としていく。あの人この人にも会うて、世話になったなあ、面倒掛けたなあと、頭を下げて礼をいうて、業を果たして出直すのや。それが一番人間らしい死に方やで」と河原町大教会初代の深谷源次郎先生と、将棋をさしながらおっしゃった話がある。

親神様の御守護を頂き、教祖の道具衆として、家族又用木信者の皆様の　支（ささえ）を頂きながら、時旬の勤めにお使い頂きたい　その日まで　「思」



訃報

高田準一氏

眞府分教会前会長

十月二十五日出直されました。

享年　八十九才

橘高キヌヨ姉

國須分教会長

十一月五日出直されました。

享年　九十五才

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます 親神天理王命の御前に　会長 上原理一 慎しんで申し上げます

親神様には 一列子供の陽気ぐらしを楽しみに この世と人間をお創造になったばかりでなく 永の年限変わることなく親心と御守護によってお育て下さいました　その御苦労は計り知れないものがあります　加えて 親心とその御苦労が分からず我身思案にくれて陽気ぐらしとかけ離れてゆく姿を哀れと思召されるや天保九年十月二十六日 教祖を社とお定めになり これの世界だすけの道をおつけ下さいました　誠に有難く勿体ない極みと 御礼申し上げる次第でございます　以来 身上事情にお手入れを頂きお引き寄せ頂いたお互いは かしものかりものの喜びとご恩報じの思いと共に 世界一列を助けたいとの親心を我が心として日々朝夕に御礼申し上げつつ たすけ一条の上に務め励ませて頂いております

その中に 今日の吉日は これの名称にお許し下さいました御祭り日でございます　分けてもこの月は 立教の元一日を記念して秋の大祭がつとめられる月でありますので　その理にならい 只今からおつとめ奉仕者一同心を睦び合わせて 明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて 秋の大祭を執り行わせて頂きます

御前には 稔りの秋の喜び心一杯に今日の日を待ちわび寄り集いました道の子供達が 相共にお歌を唱和し日頃のご高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

又 本日は 世話人島村廣義先生にお入り込みを頂いております　時旬に当たってのおぢばの声をお聞かせ頂いて 改めて夫々の心の向きをおぢばへと正し どうでも親神様教祖にお喜び頂けるよう心を一つに揃えて成人への歩みを進ませて頂く覚悟でございます　合わせて創立百十周年に向けての歩みにもより一層力を入れて取り組みたいと存じます　その為にも 来月の決起の集い目指し ますく勇んで百万軒にをいがけに陽気ぐらし講座開催におつとめの練習にと勤め励ませて頂く所存でございます　更には又 年頭に定めた心定めの完遂を目指し 本年残された二ヶ月余り精一杯勤め切らせて頂く覚悟でございます

何卒 親神様には 皆の真実誠の心をお受け取り下さいまして　万たすけの上に自由の御守護を賜り 人々が真の親心に触れ一列兄弟の理に目覚め互いに助け合う陽気ぐらしの世の状に一日も早くお導き下さいますよう 一同と共に慎んでお願い申し上げます

ふたことみこと

上級の秋季大祭に、そのまた上級の会長様の代位で、理事先生の御参拝を戴いた。

「老人は過去を語り、若者は未来を語る」と申されて、「今、飛びきりの話など持ち合わせぬ」と前置きされての話。戦前、戦中、戦後の話など、なるほど古い話だ、しかし天保九年から見ればとても新しい事で、たかだか六～七十年以前の話であるから勘違いしてはいけない。

その理事先生は御歳九〇才とか？明治の後半に生まれて道一筋、凛としたものである、とくに道の先達の布教姿や命がけの信仰に、自らも経験された「名称の取り消し」それを当時の人達が再興されたのだから…。

それは凄い事であって、到底今の私の信仰態度では真似さえ出来ない事であります。

全教あげてその姿勢に取り組むよう促されている昨今、過去の話ではなく、未来の話のような今の姿、真の布教道として「聞くだけでなしに通れ！」と終わった、そんな思いがいつまで続けられるのか、頑張らなくてはと意気込みだけの昨今です。